

石川清英氏博士論文審査要旨

I. 論文の主題と構成

石川清英氏が提出した博士論文は「信用金庫の破綻要因と経営行動」のタイトルが付され、以下の12章および参考文献から構成されている。

- 第1章 序論
 - 第2章 信用金庫破綻の概要
 - 第3章 先行研究
 - 第4章 研究方法
 - 第5章 マハラノビス距離を用いた1変量解析による破綻兆候の検出
 - 第6章 多変量データ分析と破綻プロセス
 - 第7章 伏見信用金庫（京都みやこ信用金庫）の破綻
 - 第8章 西陣信用金庫の破綻
 - 第9章 相互信用金庫の破綻
 - 第10章 ケーススタディの再構成および解釈と破綻プロセスとの照合
 - 第11章 経営改善および破綻防止に向けての対応策
 - 第12章 結び
- 参考文献

II. 論文の概要

信用金庫は、協同組織金融機関であり、中小企業向けの地域金融に従事してきた。戦後の経済発展にとってその役割は重要で、地方の中小企業金融での貢献は比類がないものであった。ただし、信用金庫の機関数は他業態に比べて多いが、経営規模は小さいという特徴を持っている。

このためか、バブル崩壊に伴う平成の金融危機に際し、それ以前に450以上あった信用金庫は、危機が収束する中で300を割り込むまでに減少した。石川氏の学位論文の目的は、これらの信用金庫を対象とし、信用金庫破綻のプロセスを分析することによりその原因を特定し、破綻を防止するための経営改善を提案するところにある。

そのために、まず第1章序論では、研究目的、研究の背景、研究の必要性、研究方法、研究の概要などが纏められている。

続く第2章では、信用金庫破綻の概要が、信用金庫と信用金庫制度、破綻処理、金融機関破綻、分析対象とした信用金庫、などについて述べられている。

第3章は先行研究を取り上げており、研究の骨格をなす財務諸表分析の諸研究が、伝

統的な研究から統計的技法を用いる研究、最近のより精緻な分析手法を用いる研究、金融機関破綻に関する研究、伝統的な倒産予測研究、早期警報モデル、信用金庫破綻の研究、などに分類して取り上げられ、広範囲にわたる関連研究レビューとなっている。

第4章は、研究方法について論じており、研究目的と研究方法、ケーススタディ研究、本研究で採用した研究方法と分析手法、などについて精緻な検討が行われている。

第5章は、サンプルとして採用した倒産信用金庫と健全信用金庫の財務諸表データが、1変量分析の手法を用いて分析されている。これにより、健全信用金庫と対比した破綻信用金庫の財務諸表上の特徴が、破綻10年前にさかのぼって、明らかにされている。

第6章では、同サンプル財務諸表データに、多変量分析の手法を適用し、多変量としての破綻信用金庫の特徴が把握されると共に、その10年間にわたる時系列の変化が破綻プロセスとして纏められている。

第7章、第8章、第9章、の3章では、破綻した伏見信用金庫、西陣信用金庫、相互信用金庫、の3金庫がケースとして取り上げられ、関係資料並びに関係者からの聞き取りの結果が、破綻に関わる信用金庫経営の実態として記述されている。

第10章では、ケーススタディの再構成と解釈がなされ、データ分析により導出された破綻プロセスとの照合がなされると共に、信用金庫破綻の引き金となる経営行動と経営危機に対する対応が示されている。

第11章では、前章までのケースを用いた検討に基づき、破綻を防止するための方策が、経営体質、経営行動、経営悪化時の対応、信用リスク管理手法、などの側面について考察されている。

第12章では、研究を総括した後、分析結果を総合的に検討して評価を与え、研究の意義と貢献を明らかにし、最後に研究の限界と今後の研究の必要性について述べている。

Ⅲ. 論文の評価

この学位論文は、やや特殊な時期であるバブル期後の信用金庫業界を対象とした上で、伝統的な倒産予測分析を行うことを通して、破綻のプロセスと原因を明らかにし、更に、3件の破綻ケースを用いて、破綻の内実を探ることを通して、通常は表面化しない破綻の実情に迫り、それらを踏まえて、破綻を回避するための改善策を提示している。これらの一連の検討は、規模が大きく一貫性を備えた研究体系を構成することを目指すものであるが、その所期の目的をほぼ成し遂げている。

信用金庫業界を対象とする破綻研究はこれまでそれほど多くはなく、その体系的な研究はそれ自体少なくない意義を持つが、中でも、その最初の研究プロセスである財務データの統計的分析では、すべての財務諸表項目を対象に破綻10年前までさかのぼり、

破綻の兆候が、経営体質、経営行動、危機に対する対応、の3側面にどのように現れるかを、丹念かつ精緻に検討している。これは先行研究にも類を見ない研究成果である。

また、3件の破綻ケースでは、これまでつまびらかにされて来なかった、破綻に至る信用金庫経営の実情を、入手が困難な諸資料と関係者からの聞き取りを通して、相当程度明らかにしている。これは、経営破綻についての貴重な資料としての意義を持つであろう。

石川氏の学位論文は、このように少なくない意義を持つが、いくつかの気になる点も存在している。中でも、採用されている分析手法は、これまでの伝統的手法を踏襲するもので新規性に乏しく、何らかの新たな分析上の工夫があれば、よりオリジナリティが高い結果が得られたのではないかと不満が残る。ケースについても、利用可能な資料と聞き取り可能な関係者の制約からか、記述が尽くされておらず、消化不良の感がぬぐえない。破綻の原因となる経営体質、経営行動、危機への対応についても、これまでの金融機関破綻での観察とそれほど異ならず、経営改善策もそれほどユニークといえるものではない。また、日本語についても、より洗練された表現であれば、という願望が最後まで消え去ることはなかった。

IV. 結論

以上、石川氏の学位論文は、洗練度に改善が可能であるものの、実務家の視点に基づき、信用金庫業界を対象とした体系的で丁寧な破綻研究という点で、少なくない貢献が認められる。従って、本論文は、滋賀大学大学院経済経営リスク専攻博士(経営学)にふさわしい研究成果であると結論できる。

以上